

映画とワインパーティ（宴会）に明け暮れた 10 日間の大西洋から、カリブ海に入るとキューバが右舷に見え始めた。その翌日朝モンテゴベイに入港した。

ジャマイカといえばレゲエとボブ・マーリー。聞いたことはあってもほとんど何も知らない。俄勉強では間に合わないからもうあきらめた。モンテゴベイはキングストンに次ぐジャマイカ第 2 の都市。オプションツアーを申し込んでない 6 人で自由行動をすることになった。

ジャマイカにはグレートハウスと呼ばれる豪華な邸宅が各地に残っている。かつてジャマイカがイギリスの植民地だった時代、さとうきびプランテーションの所有者などの富豪は、はるかカリブの地に移住しながらも、故郷を懐かしんで、わざわざイギリスから家具を取り寄せ、ビクトリア様式の邸宅を建てた。そのひとつのローズ・ホール・グレートハウスに行くことにして、港からタクシー（ミニバン）に乗った。

市街を抜けて、50 分ほどで到着。“魔女の館”とも呼ばれているこの邸宅、入場料@ US \$ 15 で現地ガイドがつく。この邸宅にまつわる話を聞いた。18 歳でアイルランドから嫁いできたアニーは、3 人の夫と使用人を次々と殺害する。最後は、自分も 29 歳で奴隷たちに殺されてしまう。そのアニーが 150 年経った今でも、ホワイティッチという幽霊となって現れるという。館内を案内してくれた若くて健康そうな女性ガイドは、最後に屋外にあるアニーの墓まで私たちを連れて行き、その物語の歌を歌ってくれた。伝説に過ぎないというこの話、信じてしまいそうな雰囲気だった。

1 時間ほどで見学を終え、待っていてもらったタクシーでダウンタウン近くまで戻ってきた。日差しはそれほど強くないのに、湿気が多く蒸し暑い。通りに面した店でひと休み。渴いたのどにビールが旨い。ジャマイカで最もポピュラーな“レッド・ストライプ”という軽めのビールだ。このあたりが一番の繁華街のようだ。バスも走っているが、初めての旅行者には利用できない。そこからビーチ近くまでまたタクシーで移動して昼食。レストランはそのまま海に通じていて、更衣室やシャワーも設備されていた。水着を持ってきていた 3 人は海に入った。「せっかくカリブ海まで来て泳がないの？もったいな～い！」と言われたが、私の持っている地味な競泳用水着は、ここではむしろ目立ってしまうだろう。結局私はこの旅の 105 日間、水着を着る機会はなく、海にも船のプールにも入らなかった。

モンテゴベイでの買い物は麻袋入りのブルーマウンテンのコーヒー豆とラム酒だった。帰船リミットは 22 時だったが、雨も降りだし、暗くなると治安はあまり良くないということだったので、夕食は船でということで、タクシーをひろって港に戻った。きょうの移動はすべてタクシーだったが、それでもオプションツアーの半額ぐらいだったと思う。

港のショッピングセンターで、大西洋で書き溜めておいた絵はがきや“わりい”の原稿を投函した。ジャマイカの郵便事情が非常に悪いということを知ったのは、帰国して 3 週間ほど経ってからだった。モンテゴベイで投函した

絵はがきが 6 月になって自宅に届いた。その頃何人かの友人からも、4 月の消印の絵はがきが 2 ヶ月遅れで届いたと電話をもらった。ジャマイカの旅行ガイドブックを本屋で立ち読みしてみると、ジャマイカでは、郵便はエアメールでも 20 日以上かかるから、急ぐならアメリカまで持っていったほうが良いとあった。事前に調べておかなかったのがいけなかったのだろう。

モンテゴベイ出港、23 時。ラスパルマスから水先案内人として乗り込んでいた、健康アドバイザー（鍼灸師、太極拳師範）の大沢則夫さんやドキュメンタリー映像作家の森達也さんがここで下船された。大沢さんは、町田在住と知ってよけいに親しみを感じるのだが、飄々とした、それでいてユーモアも解する人だ。大西洋上でのある朝、太極拳の途中で、「あっ、鯨だあ～！」と誰かが叫んだ。その声にみんな一斉にその声の方向へ走った。もちろん私も…。この航海中初めて私は鯨を見た。ど近眼の私でも、潮を吹く鯨をはっきり見ることができた距離だった。鯨の姿が波に消えるまで見て太極拳の場所に戻ると、大沢さんは「鯨だからといって目くじら立てたりはしません。さあ、やりましょう。」と何事もなかったかのように続行した。彼の講座で、「アメージング・グレイス」の曲に合わせた 24 式太極拳と剣を使っただけの太極拳を見た。優雅な動きと対照的なすばやい剣の動き、どちらも美しかった。彼は綱引きの公式審判員でもあるという。

森達也さんの講座では、ドキュメンタリー映画、「A」と [A 2] を見た。これは、地下鉄サリン事件後、オウムバッシングが続く中、あえてオウムの「中」から「外」を映しだし、ひとりの信者とその施設内部に視点を置きながら、当時の社会とオウムの双方を追ったドキュメンタリー映画だ。全体像を多面的でなくある視点から一方的に捉えて報道するのがメディアであると彼は言う。彼の住んでいる松戸の市役所前の看板に「人権はみながつももの守るもの」というのがあり、そのすぐ隣には「オウム信者に住民票登録はお断り」というのがあったそうだ。これを矛盾と思わずマヒしてしまっている人間が怖い、と彼は言う。また興味深かったのは、「放送禁止歌」の映像だった。「竹田の子守唄」や「イムジン川」はかつて放送禁止歌だった。そうしたのは誰？その理由は？ピンクレディの「UFO」はイントロにモールス信号の SOS が入っていて放送禁止になりかけたのを、その部分を削除して OK になったという。これは本にもなっているのでぜひ読んでみたい。

棧橋に立つ彼らの姿が豆粒のようになって見えなくなった後も、紙テープの切れ端を持ったまま、モンテゴベイの街の灯が見えなくなるまでデッキにいた。久しぶりに陸上を歩きまわりいつもより体力を使っているはずなのに、まだ自分のキャビンに戻る気にならなくて、Kさんと「波へい」で飲んでしまった。彼女は毎日私の 3 倍くらい講座に参加し、朝から夜まで動き回っている。うらやましいくらい元気である。

3 日後はいよいよパナマ運河通過だ。